

東久留米市 市民大学

「自由学園の教育と「京都学派」の思想～戦後「夏期学校」にみる生涯教育の展開～」

田口 玄一郎

近代日本の独創的な哲学者・西田幾多郎を中心に形成された「京都学派」の人びとが、戦後自由学園理事長を務めた天野貞祐を介して来校し、1955 年から 30 年以上にわたり毎年夏に開催された女子最高学部卒業生対象の「夏期学校」に登壇したことを紹介する。近年の生涯教育(学習)の動向とその教育哲学的な意義と課題を確認しつつ、自由学園女子最高学部卒業生の生涯教育に関わった京都学派の戦後の思索に光を当てる。

自己紹介—わたしと「京都学派」研究

発表者は自由学園の中学、高校、大学(最高学部:以下、学部)で学び、この東久留米市の地で10年間過ごす人生の貴重な機会を与えられた。いつかその恩返しがしたいと願っていたので、今回この場に立てることを大変光栄に思う。

発表者は「京都学派」の思想について研究している。研究のきっかけは、学部在学中の戦後自由学園理事長を長年務めた天野貞祐(1884-1980:京都学派のカント哲学研究者)の著作集(栗田出版:全 9 巻)との出会いであった。学部卒業後は大学院へ進学し、キリスト教思想や教育哲学について学びながら京都学派の人びとの思想研究を続けた(2020 年 7 月に博士論文「木村素衛の教育思想研究—京都学派の戦後思想の一射程」を神戸大学に提出)。

大学院で京都学派の研究を続ける中で、彼らの多くが天野を介して戦後の自由学園に来校していた事実を知った。母校の足元には京都学派の人びとによる哲学的精神の伝統がある—わたしにとってこのことは単なる偶然とは思えず、学部在学時の天野の著作集との出会いからすでに定められた運命のように感じられたのである。これが、わたしが自由学園に於いて京都学派を研究する理由である。これまで「京都学派」の思想と向き合い続けることができたのは自由学園のおかげであり、京都学派研究はわたしのライフワークとなった。

生涯教育と哲学

近年「リカレント教育」や「リスキリング教育」が注目され、

生涯学習(教育)とは何かが改めて問われている。歴史的には、中央教育審議会答申「後期中等教育の拡充整備について」(1966 年 10 月 31 日)が生涯教育の必要を訴えた嚆矢とされる。「後期中等教育の拡充整備を推進するとともに、その成果をさらに継続発展させることができる教育的な環境条件を整備することは、一生を通じての教育という観点からきわめて重要である」(傍点引用者:なおこの答申の別記として提出されたのが有名な「期待される人間像」である)。その後、生涯学習局の設置(1988)を経て改正後の教育基本法(2006)第 3 条において生涯教育(学習)の位置づけは明確となる。

国外に目を向けるならば、ユネスコ教育国際開発委員会作成の「フォール・レポート」と呼ばれる“*Learning to Be*”(1972)が有名である。このレポートの基本的な考えの一つが、全面的で生涯にわたる教育(over-all, lifelong education)である。「もはや我々は、一度にすべての知識を獲得しようと熱心になるのではなく、全生涯を通じて(all through life)着実に進展しつつある知識の体系を構築する方法を学ぶ—『在ることを学ぶ』(learn to be)—べきです。」[Faure1972/2013:vii-viii(フォール報告書検討委員会訳 1976:1-2:一部改訳)]。現代教育哲学者のビースタ(Gert Biesta, 1957-)はこのレポートを「人間中心的・民主主義的な」(humanistic & democratic)生涯教育を重視したものと評価している[Biesta2021]。

他方、「生涯教育」(Lifelong Education)が 21 世紀以降に「生涯学習」(Lifelong Learning)へ変化する中で、生涯

学習の個人化とそれに伴う学びの質的变化がもたらされたことに対してビースタは警鐘を鳴らす。生涯教育の「学習」化は、先の「フォール・レポート」の中で示された「在ることを学ぶ」を「稼ぐために学ぶ」へ変質させるなどさまざまな変化をもたらすと考えられるからである[Biesta2006]。

以上の国内外の動向を踏まえたとき、東久留米市の生涯学習の政策名(基本目標)「共に創るにぎわいあふれるまち」は民主主義の理想を目指す取り組みとしての大きな意義をもっているといえるだろう。

生涯教育の理想モデルについては、近代では教育哲学者のデューイ(John Dewey, 1859-1952)の次の言葉にみることができる。「[...]社会的な生(social life)はその生涯にわたり(for its own permanence)教えたり学んだりすることを求めるだけでなく、まさに共に生活するという過程が教育する(educates)のである」[Dewey1916/2018:8(松野訳1975:18:一部改訳)]。さらに近年では哲学者のヌスbaum(Martha Nussbaum, 1947-)による「人文学」の再評価の議論のうちにも確認することができると思われる。ヌスbaumは、他者への関心を開く力を涵養するために人文学が必要としているものの一つとして、他人の経験について想像する能力を養うことができる「遊び」(play)を挙げている[Nussbaum97(小沢ほか訳2013:126-127)]。遊びを「余暇」と捉えるならば、「学校(school)」の語源であるギリシャ語の‘scholē’(余暇)にいきつく。余暇(遊び)としての人文学を学ぶ意義とは、生涯を通じて他者と共に人間らしく生きることを通して日々の仕事をより活性化させることにあるといえる。

京都学派について

西田幾多郎(1870-1945)は近代日本の独創的な哲学者である。戦前の京都帝国大学教授の西田の許で学ぶために集まり形成された哲学のネットワークが「京都学派」と呼ばれ、西田哲学と京都学派の研究は現在国内外で広がっている。

「京都学派」の定義をめぐる議論は多数存在するが、近年では生前の彼らと直接関わりのない次世代をも含めたネットワークとして再評価の可否が問われている[藤田 2018]。「京都学派」は戦前の京都帝大の哲学科を構成した 4 つの講座(哲学・哲学史、倫理学、宗教学、教育学・教授法)に対応して哲学の多様な展開をみせ、戦後には各地(自由学園を含め)で新たな思想を発展した。

「京都学派」の思想の原点は西田の「純粋経験」である。

「自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している。」[西田 1911/2006:13]西田は「主客合一」の純粋経験を矛盾・対立を繰り返しながら生涯成長し続ける動的なあり方として捉えている。

自由学園の生涯学習～戦後「夏期学校」の京都学派の講義を事例に～

自由学園と西田の関係を考えると、西田の姪で哲学者の高橋ふみ(1901-1945)と天野貞祐が重要である。高橋はかつて学園の国語教師であった。哲学的思索とともに生きようと考えていた彼女にとって学園の教育モットーである「思想しつゝ、生活しつゝ、祈りつゝ」は魅力的に映ったように思われる[浅見 2017]。前述の天野は京都帝大の学生時代に西田から薫陶を受け、カント『純粋理性批判』の本邦初の全訳を成し遂げた際には西田から「特に天野のカント訳といふ如き位、骨を折った立派な訳は英仏語にもなからうと思ひます」(岩波茂雄宛書簡(1931 年 7 月 16 日付))と称賛された。

自由学園の生徒向けに語った天野の言葉には学園教育の哲学的精神が表現されているものが多くある(「3 つの J(Jesus-Japan-Jiyu gakuen)」, 「過去には感謝、現在には信頼、未来には希望」など)。

天野のおかげで京都学派の哲学者たちの自由学園来校が実現した。とくに彼らが直接関わったのは「夏期学校」であった。男子学部と女子学部はそれぞれ戦後の新制大学発足と同時期に開学(1949-50)したが、「夏期学校」は女子学部の学生たちの卒業後二年間の学びのプログラムとして開始した。夏期学校を始めるにあたり創立者の羽仁吉一が女子学部卒業生に語ったとされる言葉が『学園新聞』第 50 号(1955 年 8 月 30 日発行)に掲載されている。

「[.....]ピリピ書第一章の“我は汝らの衷に善き業を始め給ひし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信す”であるが、今度この夏期学校をすることは、みなの中に始められた“善き業”を正しく育てゆくために大変よいと思った。[.....]立派な方々にわざわざ話しに来て頂くのに、少数の今年と去年の卒業生に門戸を狭く限ったのはこれからも、卒業後二年は夏毎に南沢に帰って来て勉強出来るということにしたいと思ったからだ。」

こうして 1955 年 8 月に第一回開催、以来 34 年間に約 136 名のさまざまな分野で活躍する研究者や専門家が代わる代わる登壇した。登壇者の専門別内訳では「文学」分野の研究者が半数以上(次に多いのが「理学」)、「文学」の分野別でみると「英文学」に次いで「哲学・思想」の研究者が多く登壇していたこと、一人あたりの登壇回数でみると多くの登壇者が 1・2 回程度であったのに対して京都学派の人びとの中には最大 18 回登壇した者がいたことも発表者が独自に調査した結果判明した(以下は京都学派の人びとが担当した夏期学校の講義名)。

- 大島康正(倫理学者)「民主主義とは何か」(1961 年夏期学校)
- 下村寅太郎(科学史家)「科学の歴史について」(1964 年夏期学校) ※登壇回数は計 17 回
- 鈴木成高(歴史学者)「歴史の知恵」(1968 年夏期学校) ※登壇回数は計 18 回
- 高山岩男(哲学史家)「公害の哲学」(1971 年夏期学校)
- 辻村公一(ドイツ哲学研究者)「思索の手仕事」(1976 年夏期学校)

※夏期学校とは別に自由学園へ来校した京都学派の哲学者たちの情報は以下のとおり：

- 高坂正顕(歴史哲学者)「人生の幸福」(1963 年 3 月第 41 回卒業式祝辞)
- 西谷啓治(宗教哲学者)「現代人と宗教」(1967 年 4 月：羽仁もと子先生御逝去十周年記念日)



現在の高等部講堂前で(左から、羽仁恵子、天野貞祐、西谷啓治)。出典：京都宗教哲学会編(1993)『溪

声 西谷啓治(上)―回想篇』灯影舎。

夏期学校に参加した女子学部卒業生たちはどのように受けとめたのだろうか。『学園新聞』103 号(1960 年 8 月発行)に掲載された次の記事にその一端をうかがい知ることができる。

「三日間の勉強を終わって最後にみんなで感想を話し合うとき、いつも語り合うことは、文学、美術、歴史、倫理、時事問題などそれぞれちがった分野でありながら、全てのお話の根底に一つの共通のもの、人生の大道とも呼ぶべきものが、流れていること、そして、それが、自由学園の生活において、朝夕励んで来た或るもの、強いて言葉に出していうならば、わたくし共を、そして歴史を支配する大いなる方を信じ、それぞれの与えられた場所で心をこめた働きをすることによってみ心を実現したいという方向と同じであるという感銘をうけることです。」

京都学派の哲学者たちによる夏期学校の講義内容には彼らの「戦後思想」の展開がみられるとともに、時代(60・70 年代)の課題に対して哲学の立場から応じようとしたスタンスが垣間見れる。なにより重要なことは、彼らの戦後思想が女子学部卒業生の上掲の言葉のうちにみられたような彼女たちの人生の奥底に流れるものに触れる一つの教育的機会となったことである。「夏期学校」に京都学派の哲学者たちが関わった貴重な記録を振り返りつつ、いま改めて哲学を学び続ける意味を考えるきっかけとなれば幸いである。

参考文献

浅見洋(2017)『おふみさんに続け！女性哲学者のフロア』ポラード出版。

Biesta, Gert. (2021) "Reclaiming a Future that Has not Yet Been: The Faure Report, UNESCO's Humanism and the Need for the Emancipation of Education," in: *International Review of Education*, Vol. 68, pp. 655-672.

Biesta, Gert. (2006) "what's the Point of Lifelong Learning if Lifelong Learning Has No Point?: On the Democratic Deficit of Policies for Lifelong Learning," in: *European Educational Research Journal*, Vol. 5, No. 3 & 4, pp. 169-180.

Dewey, John. (1916/2018) *Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education*, Myers Education Press. (松野安男訳(1975)『民主主義と教育』岩波書店)

Faure, Edgar et al. (1972/2013) *Learning to Be: The World of Education Today and Tomorrow*, UNESCO Publishing. (フォーレ報告書検討委員会(国立教育研究所内)訳(1976)『未来の学習』第一法規出版)

藤田正勝(2018)『日本哲学史』昭和堂。

西田幾多郎(1911/2006)『善の研究』岩波書店。

Nussbaum, Martha C. (2010) *Not for Profit: Why Democracy Needs the Humanities*, Princeton University Press. (小沢自然ほか訳(2013)『経済成長がすべてか？—デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波

書店)